



©UNICEF/HQ00-0983/Achinto



最初にみんなでゲームをしながらリラックスしてなかよくになりました。

ユニセフ子どもワークショップ2003

子どもの 人身売買 をなくしたい!

「子どもの人身売買」なんて聞いたことがない、という人も多いかもしれません。子どもがモノのように売り買いされるなんて、どこか別の世界の話のような気がするかもしれません。でも、世界には家族とはなれて働きに出たり、モノのように売り買いされている子どもたちがいるのは本当のことです。

2月22日に開かれた「ユニセフ子どもワークショップ2003」では、どうしてそんなことがおきるんだろう、それをなくすためにはどんなことができるんだろう、そんな疑問をみんなでぶつけあってみました。午後には、アジア7カ国で活躍するNGOのスタッフやユニセフの現地職員17人が参加して、さまざまな話を聞きました。

「子ども活動プランナー」に応募してくれたネットワーク6人からの報告です。

午前のプログラム

「ブンとミーチャのものがたり」のビデオを見た後、7つのグループに分かれて、q 悲しかったこと w 嫌なこと e 良かったこと r 変わってほしいこと t 自分たちにできること、について話し合いました。

私のグループでは次のような意見が出ました。

- q ・おとなの利益のために子どもを売り、物のように扱うこと
 - ・人身売買がいろいろあるところまで起っていて、またその現状を知らないこと
 - w ・おとなの勝手手で子どもをあつかうこと、
 - ・おとなが子どもに暴力をふるったり、だましたりすること
 - e ・希望を捨てずに、おたがいに支え合える友達がいたこと
 - ・つらい経験を話すことで、多くの人が現状を知ることができたこと
 - r ・教育を受けるなどして、人身売買の現状について知ってあげればよかった
 - ・子どもを勝手に売らない
 - t ・おとなも正しい情報を知らないから、多くの人に伝えたり教えたりしてほしい
 - ・ユニセフなどに協力してもらって、子どもを保護する施設を建てたり、薬を提供したりする
- 発表のときには、模造紙に絵を書いてカラフルに仕上げたり、人形劇のようなかたちで発表したり、各グループで工夫しました。(内田 沙希 16歳)

門 一番が居眠りをしていなかったらブンとミーチャはどうなっていたんだろう、どんなひどい状態でも学校のことを知っていて、エイズのことを知っていたらどうなっていたらどうか？ブンが自分の体験したことを村の人たちへ話してくれてよかった、などの意見が出ました。ほとんどの班では意見を物語の流れ通りに置きかえて整理しました。代表的な意見は、好き勝手するおとながいなければミーチャが死ぬことはなかったというものでした。(丸竹 拓也 13歳)

いち 一番多かった意見は、おとなが子どもを勝手に売ってしまうのはいけない、ということでした。この物語を見て「よかったところはどこ？」と聞かれ、みんなの答えは一つになりました。それは友達と助け合い、夢をあきらめず支え合ったことでした。親は自分の子どもを売った後に、その子が暴力を受けて苦しんでいることを知らずにいる。そんなおとなは許せないと思いました。(マーシー・ローズリン・萌実 13歳)

私のグループで出た意見は、次のようなものでした。人身売買をする悪いおとなは、自分の利益しか考えていない。子どもの権利を無視し、平気で子どもを物のように扱うことができる。私達にできることとして、人身売買という現状をなるべくたくさんの人に知ってもらい、人身売買から子どもを守ることができる良いおとなになってもらうこと。今の自分達の環境を当たり前のこととしてとらえないこと。人を思いやる心を忘れないこと。また、人身売買の被害にあわないために、正しい教育や情報を得られる環境が必要だ、などなど。悪いおとなだって幼い時はきっと純粋な心を持っていたと思います。心のどこかにまだ残っているはずの純粋な部分を表に引き出せばいいのかなあと思いました。(須賀 知佐子 13歳)



ブンとミーチャのビデオを見た後のグループごとの話し合いの様子



子どもの権利を買わないで『ブンとミーチャのものがたり』あらすじ

ブンは、南の国の小さな村に住む12歳の女の子。お金はないけれど、みんななかよく暮らしていました。ある日、村にテレビという名の箱がやってきました。みんな不思議な箱におおさわぎ。持ってきた男が、ブンのおとうさんにささやきます。「ブンを都会に働きに行かせなよ。子守りの仕事さ。それでこの箱の代金になるよ」 都会へのおさがれもあり、弟や妹もよろこばせたかったブンは、働きに行くことと答えました。

でも、ブンの連れていかれたところは、洋服工場。毎日朝から晩まで休みもなく、食事も十分与えられず、つらい仕事をさせられます。なぐられたりもします。そんなとき、工場の見はりの男がブンに話しかけます。「もっとかせぎのいい仕事があるんだ。紹介してやってもいいよ」 ブンは男を信用しました。1日でも早く家に帰りたいのでした。でも、連れていかれたところは薄暗い軒屋。閉じこめられ、ブンは毎日、何人もの男に乱暴されるようになってしまったのです。



毎日泣いていたブんに、同じところではたらかされていたミーチャという友達ができました。ブンとミーチャはおたがいに助けあうようになり、施設に保護されます。でも、ミーチャはすでにエイズにかかっている。「いっしょに学校に行きたかった」という言葉を残して亡くなってしまいます。ブンは、今では、施設に逃げた女の子の世話をし、ブンやミーチャのような少女がうまれぬように、山の村をまわって話を続けています。

三 ミーチャがエイズになって、死んでしまうという悲しい場面を見て、涙をこらえるのが精一杯でした。ミーチャのようにエイズに感染し、死んでしまった罪のない子どもがこの世界に何人いるのでしょうか。可哀想で可哀想で胸がしめつけられる思いです。わたしは無理に働かされることもなく、学校にも行けて、おいしくて栄養のあるご飯を毎日食べられる、それが普通だと思っていました。世界にはブンやミーチャのような子どもがたくさんいて毎日死ととなり合わせて暮らしているのです。そのことを忘れないで生きていきたいと思いました。(榎谷 芽里 14歳)

「ブンとミーチャのものがたり」を見て上のq ~ t についてまとめた結果、人身売買で子どもを「モノ」のように扱うおとな達は子どもの人権を無視しているし、そういった勝手なおとながたくさんいることは問題である。傷ついた子どもを保護する施設があつてよかった。思いやりのある心の存在は大切である。人身売買の恐ろしさをみんなに伝えさせる教育が重要で、私達はこういった事実から知っていくべきであるなどの意見から、q 「子どもの権利無視」w 「勝手なおとな」e 「心と心」r 「教育」t 「知ることからはじめよう」というキーワードにまとめました。(藤田 温乃 15歳)



グループでの話し合いをみんなに発表しました。



午後のプログラム

アジア7カ国(タイ、ベトナム、カンボジア、ミャンマー、フィリピン、ラオス、バングラデシュ)から来日していた子どもの人身売買を防止する活動をしているNGOのスタッフやユニセフの現地職員から、グループごとに話を聞きました。

カンボジア・グループ Cambodia

「OUR HOME (私たちの家)」というNGOで活動しているハン・ピボルさんの話を聞きました。カンボジアではストリートチルドレンの数が1万人を超え、問題が深刻になっています。そこでストリートチルドレンの保護のためのセンターがつけられ、昼間子どもたちが過ごせるようになっているそうです。保護された子どもの中には体を売って生活してきた子どもがたくさんいます。

ある男の子の話です。お母さんは離婚し、新しいお父さんが一緒に暮らすことになりました。新しいお父さんはよく暴力をふるい、男の子は家にいられなくなってしまいました。男の子は街でいろいろなことをして働きます。夜は体を売ります。そのうち、男の子のお母さんも、彼が働くお金で生活するようになりました。お金が無くなると、お母さんは子どもの体調を気にせず、背中をポンと押して、また働きに行かせます。お金がない日は、ホテルのゴミ箱で食べ残しを拾って食べます。それが続くと、お母さんは自分の子どもを売って、そのお金で食べ物を買っているそうです。今、この男の子はセンターに保護されています。センターでは、美容師になるためのことなどが教えられています。

お金を手に入れるために体を売ることしかできないのでしょうか、とたずねてみると、「他にも靴みがきや車をあらうなどの仕事がある。でも一番手取り早くお金が入るのが体を売ること。1回で5ドル~20ドルになる。(およそ600円~2400円、カンボジアでは1日3食、1週間は食べることができる金額)」と教えてくれました。生き抜くには、自分の体を売るという選択をばざるを得ないという現実がたしかにあります。

(マーシー・ローズリン・萌実、神谷 芽里、藤田 温乃)



バングラデシュ・グループ Bangladesh

バングラデシュのミザヌー・ラーマンさんが来てくれました。ラーマンさんは25年前に活動をはじめました。バングラデシュでは、年間1万人から2万人もの子どもや女性がいるんな商品や食べ物などに誘惑されて、人身売買の犠牲になっているそうです。人身売買される子どもの主な利用方法は、ラクダレース、性的対象、目・頭蓋骨・心臓などの臓器を取って売る、など。売られていく場所は主に中東だそうです。また親せきの間でも人身売買がおこなわれているそうです。

ラーマンさんが活動をはじめたころに比べて人身売買は減ってきているそうですが、犯罪組織化されてきているそうです。きびしい法律があるそうですが、人身売買をしている人たちは、道徳心がなく、ずるがしこいのでなかなか取りしまることができないそうです。また団体に脅迫電話がかかってくることもあるそうです。ラーマンさんの団体が助けている子どもの数は年間約400人だそうです。売買されている子どもや女性の数、1万や2万にはまだ遠くおよびません。

(丸竹 拓也、須賀 知佐子)



各国で活動するNGOやユニセフのスタッフから話を聞く参加者たち。リラックスしているような質問をすることができました。

フィリピン・グループ Philippines

ユニセフのヴィクトリア・ジュアットさんと、NGOのドロレス・アルフォルテさんから話を聞きました。フィリピンは、島が集まってできている国で、島と島の間で人身売買がおこなわれているそうです。ひとつの家庭に4~6人の子どもの子がいて、生活が大変で、小学校さえ卒業できない子もいます。ストリートチルドレンが多く、物ごいをして生活しています。お腹がすくのをもぎらわすために麻薬を使っていることもあるそうです。そのためマフィアによって管理され、パーなどで働かされることもあるそうです。

一番衝撃を受けたのは、ドロレスさんの経験談です。1993年に東京を訪れたドロレスさんが、調査のために日本のポルノ雑誌を買ったら、そこに7~9歳、11~15歳くらいと思われるフィリピンの子どもが裸のままうつっていました。雑誌を持って帰り子どもたちをさがしたところ、首都マニラの貧しい人びとが暮らす場所に見つけたそうです。子どもたちに話を聞くと、フィリピンのさまざまな地域や島からここに連れて来られ、日本人に管理されているというのです！ なかにはマニラで過ごした後、日本に連れて行かれる子どももいるといひます。現在フィリピン政府に捕まっている日本人もいるらしく、話を聞いているだけでも、同じ日本人としても恥ずかしかったです。

(内田 沙希)

いくつか質問も出ました。

Q. 人身売買の原因でもある貧富の格差の原因は何ですか？

A. 人口の40%以上が貧困層の暮らしをしています。原因にはフィリピンがにほかの国によって支配されてきた歴史があげられます。300年前にはスペインの植民地で、その後アメリカや日本にも支配され、独裁政権(マルコス政権)が20年続きました。

Q. 日本の援助交際についてどう思いますか？

A. 日本の子どもとフィリピンの子どもの環境が違います。自ら進んでそんなことをやることはフィリピンではありません。

Q. 私たちに何ができますか？

A. 世界中でこれだけ人身売買が起きていることを話し、子ども買春は犯罪だと教えてほしいです。お金を出さず断ることができません。だから、お金はほかのことに使ってほしいです。ぜひみなさんも一度フィリピンに来て、現実を知り生活を体験してください。そして、犯罪をしなくても十分に楽しい国だと伝えてほしいです。



各グループごとに、聞いたお話をもとに、人身売買のさまざまな場面を再現しました。各国の状況などが、それぞれ特徴のある発表で報告されました。

そのほかのグループで話されたこと

ミャンマー・グループ Myanmar

1990年代に働き先を求めて、多くの子どもがタイや中国に出ていった。1999年の調査の結果、そうした子どもたちが人身売買、児童労働、麻薬、エイズなどの問題に直面していることがわかった。タイなどでは、働かせるために子どもに麻薬を飲ませていることさえある。麻薬を飲むと、気分がたかまって、よく働くようになる。けれど、麻薬中毒になってしまう。ミャンマーには、人身売買を防ぐための政府の委員会や警察があるが、女の子たちは表ざたになることをいやがって、あまりうったえたりしない。

ラオス・グループ Laos

ラオスでは、6月から12月の雨季の間、多くの若者がタイへ出稼ぎに行く。はじめは、ウェイトレスになったり、工場で働いたりするが、性産業に巻き込まれる人も出てくる。子どもの人身売買には、仲介者がいて、時には警察が手を組んでいることもある。一番の予防方法は、生活能力を高め、知識を持つこと。他に現金収入を増やすためのプログラムなどがおこなわれている。

タイ・グループ Thailand

子どもを買うおとなは、タイ人だけでなく、外国人もいる。子どもは監禁され、逃げればひどい罰を受ける。長期的なケアができる保護施設などは不足している。人身売買を禁止する法律もあるが、警察はあまりきびしく取りしまろうとはしていない。タイ国内での人身売買は減っていても、まわりの貧しい国から少し豊かなタイ人が流れてくるので、人身売買の件数は増えている。防止がもっとも大切。そして、救出し、保護すること。もし自分の身に起こったら何をしてほしいか、それを考えればすべきことがわかるはず。

ベトナム・グループ Vietnam

ベトナムでは、1979年に社会の刷新政策「ドイ・モイ」がはじまった。これにより、経済にも資本主義的な仕組みが取り入れられ、人びとの生活も豊かになったが、人身売買の問題が起ころはじめたのはドイ・モイがはじまってからである。ベトナムには、50以上の民族が暮らしていて、経済的に貧しい少数民族が人身売買に利用されやすい。最近では政府の防止キャンペーンの情報が伝わるようになってきたが、まだ増加の傾向にある。防止に協力することが最初にやらなければならないことである。

ワークショップで感じたこと

私はこのワークショップで日本人がおこなっている行為を改めて知り、日本で人身売買がどれだけ軽く受け止められているかを感じざるを得ませんでした。先進国が、お金を武器に他国の子どもの人権を奪うということは絶対にあってはならないことで、もっとほかにもやるべき役割があるのではないのでしょうか？ 多くの人に関心を持ってもらうためにも、みんなでこの問題を伝えていかなければならないと思いました。内田 沙希

日本のぼくたちは結構裕福なのでそのことを頭において生活しようと思います。またぼくたちが将来おとなになった時、人身売買をしないことがぼくたちにできる最大のことだと思います。丸竹 拓也

参加者は最後に、人型に切りぬかれた画用紙に、自分の似顔絵と自分がこれからやりたいことやメッセージを手紙にして書きました。それを大きな模造紙に手をつないでいるようにはっていました。



どもでお金もうけをするおとなのずるがしこさも悲しく思っています。ワークショップで見たこと、聞いたことを、自分の内に留めず、周りの人に発信することを、ある種の使命だと思って、行動していきたいと思えます。藤田 温乃

どのグループの発表を聞いても「子どもの人身売買」は絶対にいけないことだと強く思いました。子どもの人身売買をなくすためにどうしたらよいか話し合いましたが、ほとんどの人が、厳しい法律を作ってやめさせるのがよいという意見でした。私も法律を作ることは大切だと思いますが、それだけではなくおとなが働くことができるような仕事をたくさん作ることが必要だと思います。おとなが働いて給料をもらえれば、子ども達にご飯をたべさせることができるようになります。そうすれば子ども達は安心して学校へ行けるようになると思います。マーシー・ローズリン・萌実

初対面の人たちと話し合ったりするのは初めてで緊張しましたが、よい経験になりました。一番心に残ったのはわたしたちと年代の子が人身売買の犠牲になっていたことです。同じ命としてこの世に生まれてきたのに、毎日毎日生きるために体を売り、好きでもないことをさせられ苦しんでいる子どもがたくさんいます。わたしはこの現状をより多くの人に伝えたい。多くの人の心に訴えたいです。子どものことを真剣に考えて下さい。子どもの権利を守り、同じ人間だと理解して下さい。やめて下さい、人身売買。神谷 芽里

子ども達は、自分は生きる権利があるんだ、ということをおとなに訴えないといけないなと思いました。人身売買の問題に直接働きかけたりすることはできないかもしれないけれど、今、自分にできることをどんどん実践していきたいと考えています。須賀 知佐子

